

歌集『溪流唱』「山河哀傷吟」の「獅子舞の歌」をめぐって

Short essay "Shishi-mai no uta" in Tanka poems "Keiryūshō"

宮木孝子

日本語コミュニケーション学科
非常勤講師

抄録：

本稿は、北原白秋の近代幽玄体（新幽玄体）の形成をたどるなどやかな試みとして、歌集『溪流唱』の短歌作法への管見をまとめるものである。その理念が白秋自身明瞭に作品上の表現となつたとする作品中にあつて、白秋の社会詠として、よく取り上げられる「秋夕夢 小河内三部唱」の「獅子舞の歌」から、その短歌作法を探り、考察する。その方法として、白秋の「新幽玄体」の表現にかかわる「写生」と「象徴」の意味を知る手がかりを、白秋が奥多摩で体験した神事の実際の記録に求め、照合して検証する。

Summary :

Hakushu Kitahara let a method of the creation of the new song succeed in this "溪流唱". I want to inspect the structure of the method of the creation of the new song called "new waka form of

mystic profundity" with "the song of the lion dance" in "溪流唱".

キーワード：近代短歌・象徴・写生・浪漫主義・郷愁

Key Words : Modern tanka, symbol, sketch, romanticism, nostalgia

歌集『溪流唱』は、白秋九番目の歌集であり、長歌九首・短歌四百八十二首をおさめた昭和九年一月から昭和十二年五月までの羈旅歌集である。歌集『椽』(昭和十年五月から十二年九月の作品を所収)と重なる時期をもつ。ただ、その作品は『椽』においては視力が徐々に悪化する中で詠われる『黒檜』の世界に続くものがある。

また、白秋の短歌の変遷をたどるとき、歌集『溪流唱』の位置づけとしては、大正十年八月刊行の歌集『雀の卵』以来の〈閑寂境〉を深め練磨し、『風隠集』『海阪』『白南風』と「近代幽玄体を樹立」

し、『夢殿』を経ての〈新幽玄体〉の完成時期の歌集といえる。白秋は、大正六年、機関誌『煙草の花』を廃刊して二十余年、自ら主宰する短歌雑誌もたないでいたが、昭和十年六月、多磨短歌会を結成し、その機関誌である『多磨』を創刊した。

本稿においては、『溪流唱』全体ではなく、「秋夕夢 小河内三部唱」の中の「山河哀傷吟」の十一番目に属する「獅子舞の歌」十八首の表現の特徴について考察したい。

この十八首は、あまり取り上げられることもなく、『溪流唱』の秀歌として有名な、「行く水の目にとどまらぬ青水沫あわなま鶴鴿の尾は触れにたりけり」のようにこの時期の白秋の歌風を代表する位置づけるものでもない。しかし、白秋の歌論の表現としての短歌形成や歌風の変遷を見るとき、これら「獅子踊り」の作品もまた、この時期の白秋を表す作品として留意すべき作品と考える。

○

『溪流唱』は、目次によれば、「溪流唱」（溪流唱、音・光・風、初夏の茶寮）「雪冠」（雪冠）、「水戸頌」（水戸頌）、「秋夕夢 小河内三部唱」（山河哀傷吟、山河愛惜吟、嚴冬一夜吟）、「多宝塔」（信貴山、鹿寄せ、音聞山、泉州吟）、「伊勢」（伊勢、続伊勢、京）、「枯山」（磯部行、鷄市、達磨市）、「夏鳥」（雲仙つつじ、嶋原、伊王嶋、慶州夜行 新羅抄 その一、秘苑 新羅抄 その二、夏鳥）の八章からなる。

このように八章からなる歌集であるが、世に多く評価されるのは、一章目の「溪流唱」と四章目の「秋夕夢 小河内三部唱」の二つの章である。それは、前者が、この年、結成された「多磨短歌会」の詩精神「近代幽玄体」の獲得にかかわった作品群があり、後者は、当時の社会的事件となった奥多摩小河内村民の陳情事件への思いが詠われ、白秋の社会意識を知る作品とされているからである。

さて、「山河哀傷吟」は、四章目の「秋夕夢 小河内三部唱」の一番目に置かれており、小河内村までの旅程の風景と、着いた後の宿での思い、帰路に出会った村の祭りの光景などが詠われ、そこに白秋の貯水池建設のため、村を追われる人々への思いが写生的に詠まれている。「山河愛惜吟」、「嚴冬一夜吟」の三部の始めに置かれた章である。この三部にはそれぞれ小序が付いており、これらの序は、日付や行動などが記録文のようにしたためられ、そこでの感想も漢語表現を用いた簡潔な文体で記されている。全百四十九首。

その詞書き（他の二部は「小序」とある）には、

昭和十年八月三十一日、白山春邦画伯夫妻と共に奥多摩小河内村内鶴の湯に探勝、鶴屋といふに泊る。合も二百十日前後に当り、山嶽峡谷、朝夕雲霧去来し、初秋の霖雨、時に蕭蕭、時にまた微々たり。この鶴の湯、原は懸崖にあり、極めて寒村にして、未だにラムプを点じ、殆ど食料の採るべきものなし。ただ

魚に山魚あり、清楚愛すべし。この小河内の地たる、最近伝ふるに、今や全村をあげて水底四百尺下に入没せむとし、廃郷分散の運命にあり。蓋し東京府の大貯水池として予定せらるるといふ。まことに山河の滅びんとする、その生色を奪われ居処を失ふもの、必ずしも魚介・禽獣草木のみにあらず、かの蒼天にして父祖の声咳に背き、産土にして聚落と絶つ。人間離苦、哀別の惨亦曰ふべからず。乃ち惆悵として我に山河哀傷吟の新唱成る。

そして、「水上」七首、「蓬萊の懸崖」十一首、「秋夕夢」六首、「鶴の湯」九首、「深夜に聴く」四首、「騎牛」三首、「村人に代わりて」四首、「二百十日」八首、「峡谷の蝶」五首、「昼に聴く」二首、「獅子舞の歌」十八首、「鷺」十四首と続く。

この年、多磨短歌会結成を結成した白秋が、その後、大阪朝日新聞の囑を受け、七月に朝鮮旅行へ旅立ち、体調を悪化させ日本にもどった翌月のことである。藪田義雄『評伝北原白秋』（玉川大学出版部昭和五十三年四月）によれば、当初は疲れを癒す「遊行」の旅を考えていたのが、雨天によって、変更したなかで、白山画伯の話から奥多摩の鶴の湯を知り、八月三十一日、「立川から青梅線で御岳まで行き、御岳から氷川へ、氷川から鶴の湯へ。山峡の九十九折を小型自動車で駛らした。ついでみると小河内であった」とある。昭和七年、東京市議会は、小河内ダム建設事業案を可決。すでにこ

の小河内村は、東京府の水壑として貯水池の予定地であつて全村が水没することが決まっていた。ただ、それは玉川下流の水利権をもつ、神奈川県「二ヶ領用水組合」の反対により進まず、白秋が訪れた昭和十年の秋、農民たちの失業対策として防砂ダムの工事を開始した。しかし、その賃金は低く、「そのため村の有力者は、ダム工事開始と村民の補償問題に奔走したが、東京市の反応は冷たかつた」（江井秀夫『多磨近現代の軌跡』（けやき出版一九九五年五月）より）という。陳情事件が起こる数か月前、まさに貧窮した村の姿を白秋は見たのである。

まことに山河の滅びんとする、その生色を奪われ居処を失うもの、必ずしも魚介・禽獣草木のみにあらず、かの蒼天にして父祖の声咳に背き、産土にして聚落と絶つ。人間離苦、哀別の惨亦曰ふべからず。

白山との隠れ里を訪ねるような行楽の旅は、湖底に沈む運命を定められた村の自然、村民の生活を知り、村人とのふれあいで一変する。厳しい調子で「哀別の惨亦曰ふべからず」と表現した白秋の衝撃は、「山河哀傷吟」九十一首を一度に『多磨』十月号に発表したことから、うかがうことができる。そして、その後も白秋から奥多摩の山河と小河内の村民の姿は離れることなく、その小序にも記されたように、この年の十二月十三日払暁の多摩の陳情団の鎮圧を知るや、同月二十三日、「潔斎、浅宵より暁闇に至る」夜を徹して「厳

冬一夜吟」七十首を書き上げる。

『白秋全集』 歌集6の「後記」で、木俣修は同年五月の『多磨』
「雑纂」で白秋が「山河哀傷吟は、私にとつては久しぶりの感興であつた。」「思いがけなく脂が乗って一夜五十首、翌夜推敲、その次の夜と続き創作がいつの間にかたまっていった」こと、「白山氏の文章と私の歌を対照していただきたい。歌材を探す旅でもなく、何一つ意図しないで行ったことがよかつたかもしれぬ。」「小河内行きは近來の最もすぐれた清遊であつた。さうして最も深く胸を撲れた。あの山河があのまま滅びてしまふかと思ふと堪へられなくなる。一木一草にもその命をいとおしむ心が私を直に真実にした。」ことを書いたと記している。

また、篠弘は『溪流唱』と『椽』——「近代幽玄体」の葛藤——
「『国文学解釈と鑑賞』一九八五年十二月」で、「行く水の目に」の短歌を含む一連の作品が白秋の自負するものであつたのは勿論のことだが、弟子の中村正爾が「底知れぬ透徹した自然観照が、愈々掘り下げられ」（『短歌研究』昭10・5）と評価し、高田浪吉も「銀線が震えるやうな調べを持っている」（同、昭10・5）とその評価を示した後、次のように続けている。

この二歌集は、「多磨」の創刊の前後にあつて、このような美意識と感性をもって出発したのである。このことが、天才を意味するのであろうが、時代感覚に敏感であつた白秋は、しかし、それだけではなかつた。「近代幽玄体」のイメージを追いなが

らも、その一方で、豊かな感受性を駆使して、時代の方向をきびしく嗅ぎ取っていくのである。

そして、同評論文中、続く「2 時代感覚の獲得」では、坪田哲久「歌壇私見」（『短歌研究』昭10・5）での『溪流唱』批判を引用している。坪田は、「これらの歌には生々とした真率に一本通つたものが全然ないといつてよい。あるものは、作者の「遊び」の心とそれを表現するための豊富華麗なテクニクだけである。私は、『溪流唱』を血の通つた生々しい人間の歌——（文学）であるといふ風にはどうしても考えることは出来ないのだ。」とあり、この評価に対して、篠は「こうした批判を白秋は見過ごして」おらず「みずからの時代感覚によつて、それを察知していたからではないだろうか。昭和^マ一〇年の夏に奥多摩小河内村を訪れたのをきっかけとして、一六一首からなる「山河哀傷吟」「山河愛情吟」「嚴冬一夜吟」を生み出してくるのである。」として、『溪流唱』の中の「嚴冬一夜吟」をその例とし、さらに『椽』におさめられた二・二六事件に際して詠まれた短歌、そして、昭和十一年八月「多磨」に発表された決起した将校たちの死刑執行を詠んだ「執行」に触れ、これらの事件歌が『椽』の「虚」の章にあることの意味を次のように指摘し、結んでいる。

この「虚しさ」こそ、歌集後半の主題となつていゝものである。このことは「近代幽玄体」がひしひしと時代の重苦しさを感じながら、おのずから「生々しい人間の歌」の方向に深化し

ていったことを検証してやまない。

(略)

はげしい「虚しさ」を感じ取ることによって、『椽』は暗い時代の前夜を語るものとなったのである。このように時代感覚をひそかに獲得してくる過程は、白秋がその内部に自己批判の眼をもっていたからであり、それは白秋にとつてのヒューマニズムにほかならなかった。

つまり、篠は『溪流唱』での「山河哀傷吟」から、「近代幽玄体」は深まりを見せ、「美意識と感性」の表現に、現実世界を生きる「生々しい人間」を感じさせるリアリティの獲得がなされる、それは、白秋が掴んだ時代感覚でもあった。よって、白秋の奥多摩小河内村への旅は、もともと白山画伯との遊行の旅ではなく、既に昭和七年七月には、東京市の諮問に対して小河内村が「大東京市百年の大計の前には一村一郷の権益主張を固執するものに非ずとの見地より、多大の犠牲を払うことを忍びて耐えて賛意を表する次第なり、即ち、斯くなるを欲するものに非ずして、斯くなるのやむを得ざるをあきらむるものなり」(小河内ダムと湖底の村)奥多摩郷土資料館一九八八(三)の状態を白秋は知っていて、この社会的事件への関心をもって白秋はこの旅に出たということである。

ただ、先にも引用した白秋の弟子でもある藪田義雄の『評伝 北原白秋』の「第二十章『溪流唱』と多磨歌風の展開」においては、「地図でしらべて、日原の奥らしい」ということがわかった。そして「着

いてみると小河内であった。」とあり、着くまでの白秋について述べた記述には先に引用した交通手段しがなく、小河内村にたいする白秋の関心があつたようなことは書かれていない。むしろ、その場所であることを知った白秋が、帰途、九月一日、水川神社の秋まつりに遭遇し、この獅子舞も来年はどうなるのか、「村は滅びてしまえば何もかも失われていくのではないか、貯水池の堰堤予定地の山の下に赤い旗がひらめくを見て、村の人たち」の気持ちを推察して、「話題」は「沈み込んだ」とある。

藪田はその著の「後書き」で評伝の記述は真実に近づける努力をしたと書いてあることから、実際の小河内村への白秋の想いや関心はその場所に立ち、とりわけ土地と人間が織り成す重層的時間¹¹歴史を視覚から感じ、その空間の中で音や色彩などを通し、五感でその「悲哀」を受け止めたのであろう。であるとすれば、その想いを強烈に白秋に刻んだのは、帰路、水川神社で遭遇した「獅子舞」であつたと考えられる。

そして、こうした白秋の対象への姿勢が生じ、短歌作品が生み出される理由として、藪田、篠の両氏ともにあげるのは、衝撃を受ける体験やそうした現実を目にすると黙っていられないという、白秋の「大きな人間愛」(藪田)、「自己批判の眼をもつ」「白秋のヒューマニズム」(篠)である。

では、そうした、いわば「新幽玄体(近代幽玄体)」を深め、「多磨精神」にまで昇華される「生々しい人間」を描く、「人間愛」「ヒューマニズム」は何をもって、言葉となり、短歌となるのか。それは単

なる白秋の気性では当然なく、歌集『桐の花』詩集『思ひ出』のころから、萌芽し、それがそののちの大正期の白秋の広範な芸術、詩歌活動によって成長した白秋の詩法であり、推敲を重ね語を選んだ言葉への執着そのものと考えられよう。『桐の花』の「哀傷篇」の一群の短歌や『思ひ出』にある幼い頃の原体験から生まれたであろう数々の詩には既にその「生々しい人間」をとらえる白秋の芽生えがみられる。

○

今一度、この「獅子舞」との遭遇の時である昭和十年に至る、大正からの白秋の大きな詩業を考えると、まずは、大正七年七月から昭和八年までの鈴木三重吉との『赤い鳥』芸術運動の中においての童謡詩観、諸国民謡の取集調査、山田耕作との大正十一年から『詩と音楽』における日本語の律、音楽的調べ、響きの研磨錬成、釈超空との大正十三年から『日光』での日本の古代への関心、日本の精神風土への関心の高まりがある、それはみな大正七年から再認識した「国歌」としての詩歌を構築するための言葉獲得の努力であった。そのため、日本詩壇をけん引してきた自負から生じた若手詩人たちとの論争がある。

そして、昭和七年には、『短歌民族』を創刊する。その誌名からも分かるようにこの時期からは白秋は詩壇での活動は休止しないものの、短歌に比重を置いた活動に力を注いでいく。そして、その「短歌民族宣言」には、つぎのような鮮明な当時の白秋の歌壇での立ち

位置、時代への歌人としての宣明がある。

言霊の幸ふ国。日本。日本民族こそは民族短歌である。この民族の精神と血脈とを承け、而も常に短歌の正統を奉ずる者、茲に私達は結んで短歌民族協会を創立し、季刊『短歌民族』に抛る。

また、この創刊号では「定型短歌論」を発表し、今までの詩業を含んでの自分の歩みを振り返りつつ、今、なぜ定型短歌なのか、を論じた。

現在に於いては未来の新詩境の展開を思ふと同時に、端嚴なる短歌の三十一音型に対する執着と修道心とが、愈々増々深くなりつつある。この古形式を如何にして鮮新に生かし如何にして独自のものたらしめるかといふことである。わたくしは自己の芸術の最高峰としてこの短歌の險獄を挙げつつある。最も潔癖な守持を以て、わたくしはこの芸術に敢て自らを挺したいと思ふ。之より観れば本格の詩以外、諸種の歌謡作の如きはさのみ高しとは思へないのである。

短歌民族たる日本人にとって、何が故に定型が長久にその血肉の声となり、響となつて盡きないか、もつと感謝してよい。

私は自然に直面する。私の表現苦は如何にして真実を写し、如

何にして之に浸透し、如何にして幽遠なる奥所の命を触覚するかにある。私は自然に對ふ、私は意志する。

「短歌定型論」で述べられた考えは、昭和十年四月の「多磨宣言」の冒頭、「多磨短歌会創立の真意と為すもの、常に日本短歌の本流にあつて、この定型の精神と伝統とを継承し、更に近代の感覚と知性により、万づ現当に処し、その光輝ある未来の進展を思念し実現せむとするにあり。」という決意につながる。

『短歌民族』を創刊した、翌昭和八年には、『全貌』を創刊。そこには『赤い鳥』の鈴木三重吉とも別れ、昭和九年には、「近代幽玄体」の歌集『白南風』を刊行した。

ここで白秋の獲得した〈生々しさ〉は人間のみを対象したものではなく、自然と対峙し、そこから歴史的時間を継承する人間として、その「心眼」をもって観照し、詩、短歌、歌謡などの芸術経緯で研ぎ澄ました言語感覚をもって、〈写生〉することであったのである。この「近代幽玄体」の詩精神をもって作品化する際に不可欠な、白秋の〈写生〉については更に稿を改めて考察するつもりである。

歌語に対する「言霊」意識もこの時期から顕著になる。それは白秋が、日本人として歌人としての存在意義を支える故郷を求める意識と重なる。故郷は白秋にとって、自分自身であり、また自分を生み育ててくれた場所なのである。その場所は自分が成長し、言葉

獲得した場所である。言葉が生まれる場所でもある。白秋の言霊意識は、上代の文学にある霊力をもつ存在であるばかりでなく、地霊とも繋がる。人間一人ひとりの存在証明としての言葉なのである。言葉の生まれる場所それは人間にとつての原点、自己存在の証明ともいえる場所である。であるから、白秋の「国歌」も「我」「吾」の想いを盛る器であり、近代個人主義の社会の中で懊悩しつつ生きる人間の言葉なのである。決して国体や文芸統制の中にある言葉ではない。

それは、白秋の『思ひ出』の「わが生い立ち」が証明する。「私の郷里柳河は水郷である。そうして静かな廃市である」白秋が十六の時、沖ノ端は大火があり、美しい故郷は消えた。喪失した故郷を求める寂しさ、郷愁が『思ひ出』には溢れている。故郷喪失の想い、寂しみを白秋は気分象徴の詩歌にして表現する。この郷愁が白秋の詩精神の水脈である。

こうした白秋の特色を、高村光太郎は、明治四十四年九月の『文章世界』「北原白秋の『思ひ出』」の中で、次のように評した。

「追憶文学」の中で、異彩を放つ、白秋の「追憶」は、「非常に長いコンパスで、今と昔との両地点に立ってゐる」「『邪宗門』と同じ水脈の上のものである事は争はれない。」としたうえで、それゆえ、「『思ひ出』の各頁には、近代人の覚醒が、或る開放が、従つて或る寂寥が、トンカ ジョンの昔に糾あひだわられて、追憶の神秘のかけに眼を瞠あはつてゐる。」し、現今の追憶文学の中で、「最も強く現在を語るものの一つである。」としている。また、

「北海道の山奥の様に、まだ眼の明き切れない日本の『人間の全幅』の爲めに、かういふ事は、一面に或る力強さを感じさせられる。(略)此の詩人のレイゾン デエトルに權威を見るのである。『思い出』七章のうち、私は、『トンカ ジョンの悲哀』の、血のしたたるよなのに一番強く心を奪はれた。」とある。

ここには、気分象徴にしても、閑寂境にしても、近代幽玄体にしても、白秋の象徴表現の中にある特徴として、光太郎の指摘したように、その作品の中にある「現在」＝歴史の中の今が、そこに立つ白秋が、「血のしたたるやうに」感じられる。あきらかにそれは現実を直視する(白秋の言葉をかれば「自然に直面する」)揺るがない白秋の意志であろう。

相反する文芸思潮として多くの作家が考えていた浪漫主義・象徴主義と「写生」「真実を写す」という白秋の言葉は、当時の日本の文学界(詩歌壇)で様々な論争を生む。その検証は別稿で論じたいが、ここで、覚書として記しておきたいのが、当時、白秋が『多磨』の編集の手助けをした歌人木俣修への書簡である。(『白秋全集35書簡』所収)

昭和十年 十一月二十八日 東京砧村より 白秋

多磨今度はいよいよおくれまだ何ひとつ書けず、やはり穂積や君が東京にゐてくれぬと純粹な多磨にならぬ 色々話したいところがあるがそのうち、宮からでもきいて下さい。多磨の象徴詩

については君の理會^ワが正し。四期云々は綱領のとほり、ロマンチズムとリアリズムは我等にとつては楯の両面ではない。このことは泰西流に考へないこと。つまりは詩精神の發揚にあるが、象徴詩を以つて最高とす。それ以外小さな主義を立て、自縄自縛に己れをあやまれることは詩人の寒心すべきことと思へる。

女流の放埒については一切今後取り上げぬ方よし。いづれまた後より

「獅子舞の歌」にある写実、写生は現実をとらえながら、白秋の内部生命においては彼方なる過去の歴史もまた眼前に感じ観る。故郷喪失の思いの共感と親和感をもって、村人の獅子舞を、氷川神社の境内を、それらを包み込む自然を詠もうとする。書簡にある木俣修は昭和二十九年その著『白秋研究 I 短歌篇』の「『溪流唱』と『椽』の時代」の昭和十年の項において、「獅子舞の歌」から三首を引き、その後の短い解説に、「奥多摩氷川神社の神事を歌つたもので、獅子舞の躍動のリズムをさながらに文字に表現した象徴歌として注意すべきものであった。とも角この一作は『多磨』の方向を実作によって世に開明した大作である。この年の歌壇に問題を投げたところの歴史的な作品であった。」としている。

こうした、白秋側の評価とは、対極の理解、評価を下したひとり、昭和初期プロレタリア短歌運動で活躍し、中期『短歌評論』『短歌時代』を主宰した渡辺順三である。昭和三十九年の著『定本 近

代短歌史 下巻」の「IV白秋の『多磨』と新幽玄体」の章で、「軍国主義、ファッシズムは時を得てのさばり出していた」時代に白秋は、多磨短歌会をなし『多磨』を創刊した。このような時代の抑圧の強くなった時代に彼は「浪漫精神の復興」を主張した。歴史的現実の中で「自我の高揚」などありようはずもない。であるから、白秋のそれは、「現実から逃避した地点での、わびやさびの中世的境界にあこがれ、『古典的幽玄』をもとにした『象徴』を目標にしていた」のだとまず、「象徴」に逃げ込む「現実逃避」の短歌であり、歌論とした。そのなかで『溪流唱』の「厳冬一夜吟」について「白秋としては少ない社会詠」と認め、「これらの歌には幽玄や象徴の傾向がなく、現実主義的な把握である」としている。

この両者の評価や理解の違いは、二人の歌人の拠り所とする文学観社会観の違いからは当然といえよう。ただ、渡辺のいう根拠の「昭和10年」という年が「国体明徴」が叫ばれ、「『日本のもの』『民族的なもの』の再認識」された年であったのは事実であるが、「時代のムードが白秋をして起こしめた」と断定するのはどうであろうか。時代の機運に迎合し、白秋は短歌の「象徴」へ逃避し、それが時代に支持され『多磨』が大きな短歌団体となったとみるのはかなり狭い視座からの評価である。おそらく、時代からみれば、白秋を或る型にはめ込み論じるのが妥当と考えられたのだろう。事実、この章の終わりは白秋の死後出版された歌集『黒檜』までにもふれているが、白秋短歌の総括的评价はない。

昭和二年一月、『近代風景』『近代風景の詩』の中で、白秋はこん

なことを述べている。『近代風景』があまりに白秋色が強いとの批判に「行く道は一つである。ただその中に個の主観と形態とは厳然として個である。」とした上で、続けた。

また高く納まって象牙の塔を貴しとする私ならば、かうした『近代風景』などは、編輯刊行しないであろう。また童謡民謡の創作にも没頭しないである。私は、また象徴のを芸術最高のものとは思念するが、リアリズムの骨法は多年短歌道に於て刻苦して来た。

私はまた謂ふところの芸術至上主義者とも違った自分を知っている。人生派の詩にも充分の同意は持つてゐる。自分もこの二つの融合を常に忘れる者では無い。ある意味に於てはむしろ国士を以て任じてゐるのが私だと思つてゐる。

浪漫主義の詩精神を内包し、心眼をもつて対象である自然を観るところから、生じる象徴的表現が、自らの詩法として形成しつつあった。

大正十五年に詩話会は解散したが、あらたに詩壇をまとめ混乱を取めようと、白秋は自ら推進して昭和三年に詩人協会を作り、『詩と詩論』を創刊した。この『近代風景』の文章を載せた翌年のことである。しかし、この詩人協会も昭和六年に解散。若手の詩人やかつての弟子室生厚星との軋轢も生じる。白秋は、詩、短歌、民謡、歌謡、童謡など幅広いジャンルを分かつた活動してきたが、大正七

年の『赤い鳥』参加以降は、「謡う」ことを重視し、各地の古い伝承童謡や民謡の採集に努めるようになる。こうした活動を行いつつ、『水墨集』で「閑寂境」の世界を拓き、詩集『海豹と雲』では昭和の前衛的モダンリズム感覚の詩を表す。こうした詩業の集約する地点が、昭和九年の歌集『白南風』の「新幽玄体」という境地であり、それをまさに実感したのが、この昭和十年『溪流唱』の時である。

『溪流唱』は、顧みられることの少ない歌集であるが、こうして考えると、白秋の詩業の集大成の域に入った記念すべき歌集といえよう。先に引用した木俣修の「歴史的作品であった」とする表現は決して大袈裟なものとはいえない。

○

それにしても白秋は几帳面にペンを動かし、ノートをしたのであろうか。実に正確に氷川神社の獅子舞をとらえている。

奥多摩町誌編纂委員会から出された『奥多摩町誌資料集六 奥多摩町の民族―民俗芸能―』に記載された「大氷川の獅舞」の記録と照合しつつ、白秋が掬い取った言葉を通して、白秋の記した時の表象を検証したい。詞書の後、十三首の短歌がまず並ぶ。

〔獅子舞の歌〕

帰途、氷川の奥多摩氷川神社に詣づ。幸にも秋の祭りとして、雨中七度の神事に会ふ。増え吹く人先立ち、三頭の雄獅子雌獅子之に次

ぎ、頭の燈様の紅き目隠の布を垂れたる簾磨りの子ら二列に従ふ。その後は氏子なり。我等も之に躡きてめぐること七度なり。獅子舞の神事は、神楽殿にて、藤がかり、三拍子、神さま等いろいろあり。風俗物寂びておもしろく、獅子の面、簾磨りの衣裳など殊にめでたかりき。乃ちその獅子舞の歌に和して戯哭したる歌。竝びに小河内の鹿嶋踊り追憶の歌。

まず、「獅子舞」については、大氷川と小留浦には、寛政四年以前からあったとされており、「村内融和、一族一門の親近の場」で、「他郷へ転任した者もこの時」は祭場に故郷の地を踏んでもどるとされていた。その祭りの中心が「獅子舞」であった。

白秋が出会ったのは「大氷川の獅子舞」で、中心となるのは、「さら獅子舞」で、現在は八月十日に行われるが以前は九月一日に行われた。白秋の「帰途」も昭和十年九月一日であった。「獅子舞の威力で暴風雨を追い払うとの趣旨による祭り」で、旧名主屋敷地より、神社に向かう。その行列は、ほら貝を先頭に、神職、氏子総代、獅子舞の各役方の他に、万灯に太鼓、そして氏子一同が続く。獅子舞の定員は特になく、「狂い手『舞い方』三人、花笠（さ、らすり）六人ほか、唄方二〜三人、笛方十人内外、はやし方二人で一立を行う」〔獅子舞の演目が十立〕のため舞方は、三十人近くが関わる。この記述は、白秋が詞書に記した記載と一致し、白秋一行が出会った「獅子舞」の行列とその祭事は、山里においては壮観であり、美しいも

のであったことがわかる。

「獅子の名称と頭」・・・①大太夫②小太夫は、獅子頭はともに黒色で、大太夫は金条と黒条によるねじれ角。③女獅子は、金色の頭に小さい一本角。花笠はぼたんの花をかざす。

「衣裳・服装」・・・

獅子は、かすり模様かすりに錠形紋をあしらった広袖の腰巾着に花模様のカルサン、わらじばき。花笠のさゝらすりは、上身体は柿色紋付、裾模様の振袖姿に紅白のしごきをたれる。

白秋が詞書に「風俗物寂びておもしろく、獅子の面、髷磨りの衣裳など殊にめでたかりき。」とあるのもうなづける。

そして、「七度の神事」とあるのが、「七宮参り」のことで、この唄を歌いながら、社殿の周囲を七回まわる。獅子舞連に続き氏子が続く。白秋一行も「我等も之に躰たぐきてめぐること七度なり」とこの神事に参加したのである。その際、「家内安全、無病息災、五穀豊穰を祈念しつつ回る。

この時の「七度宮参り」の唄があり、

まいり来て御宮のか、見てあれば

八棟造りのこけらぶき

こけの上うへに生えたから松

から松も千年もたちてまいますば

君の御代こそ目出たかりけり

この後、呼び太鼓、はやし太鼓が響き、道中笛（渡り拍子）で舞役の登場となる。こうした、村に古くから伝わる神事に参加して十八首の短歌を詠む。

神事や舞の言葉を入れて読まれた作品を掲載順に、六首選んでみていこう。

- ・ 氷川ひがわのやこれのお宮にまゐり来てわれもれわもとめぐること庭
- ・ 髷まげすりささらささらとすり足に花はかざして紅あかの目かくし
- ・ ささらさらこれの氷川の秋霖あきつゆ雨に髷まげする子や父は笛吹く
- ・ 藤ふじがかり勢いきほふ雄獅子に雌メスの獅子も匂におひかかれよ神の大まへ
- ・ 三拍子さんぱしそろふ神楽かぐらのめをと獅子えやと童も連るる花杖
- ・ この森に鷹たかが棲すまむとよこの庭に黄金あまぎ敷くとよほめよこの宮

右の六首のうち前三首は、獅子舞が始まるまでの神事で、後三首は、まず、祭庭で最初に始める獅子舞の演目「藤がかり」を組み込んでいる。ここでは、神を讃仰する唄が歌われる。

まいり来てお庭のか、を見てあれば

黄金まじりの白砂を敷く

まいり来てこれの御門を押し開き

はいりて見れば唐の御所かな

この後、舞終わりのちらしの唄が、「太鼓の胴をきり、としましてさ、

らざらりとすりかえさいな」と入り獅子は、水汲みの形をとる、とある。白秋の短歌では、勢いよく、神の御前に躍り出る様子が躍動感をもって、晴れやかに詠われている。

後より二首目の「三拍子そろふ」は、神に祈りをささげる舞で、獅子はバチとバチとをうち鳴らす。獅子舞が佳境に入つて、人々の胸にバチの音色が響き、ますます、祭りの場は高揚感に包まれ、その中で、子孫繁栄、無病息災の祈りを舞う。「三拍子」の演目の唄

此の森に鷹がすむげ鈴の音

鷹じゃないもの御神楽の音

鳥居垣にこけはえて

まいる氏子も息災なるもの

これの御庭の姫小松

一枝たゆめて腰を休めろ

海のとなかの浜千鳥

波にゆられてポイと立ち候

三拍子のきり、の山

今の調子を切り変えさいな

とあり、終わりの唄「雨が降りそで雲が立つ・おいとま申していざ返さいな」で演目が終わる。

ここまで、比べてわかるように、白秋は演目と「獅子舞」の内容をすべて正確に記録的写真では詠っていない。白秋のとらえたこの神事の光景の中で、その瞬間瞬間の象徴となる動きや獅子舞の場の空間にみなぎる力を詠んでいる。それは神を畏れ、地霊を敬って

管々続いたこの村々の生活を「生々しく」描いている。ただ目の前の姿をそのままに写生するのではなく、その奥にある生命を詠おうとしたからである。実際のこの祭事における演目は、さらに続き「すりちがいに」「花がかり」「まりがかり」「竿がかり」「女獅子かくし」「ふとんばり」「白刃」とある。十三首の短歌が、そうした目前の祭礼を生々と「心眼」でとらえ詠いあげられる。そして、「獅子舞の歌」の五首の意味が深まる。終わり五首には、詞書がある。

四月、日本青年館にて、小河内村の鹿嶋踊を見しことあり。

今、氷川の獅子舞を見て、哀傷更に新たなるをおぼゆ。

・ 笛つづみ今をかぎりと鹿嶋のや神に根な哭なきて遊ぶ子ろはも

・ 水ふかくほろびむなむよは山いでてあはれちりじりに生くべかれども

・ 奥の多摩し自が産ま土と住す古こりし大おき母はの土もほろびんとす

・ 世の中よ常にもがもと清すみとつかふ山河もつひにむなしき

・ 鹿島ぶり神にいさめの笛つづみ小河内の族も今は失せなむ

〔初〕見てし山河もつひに跡なし

・ 鹿島ぶり神にいさめの笛つづみ小河内の族も今は失せなむ

〔初〕のや 〔初〕寿歌や 〔初〕今失せむとす

*〔初〕は、昭和十年十月『多磨』初出の異同

この「哀傷更に新たなるをおぼゆ」という、白秋のこの感慨は、この詞書の前に詠われた「獅子舞の歌」の時間と重なる。まことに健やかで平和で、華やいだ祭礼の獅子舞の向こうにある暗澹たる未来

と、今に繋がる過去の時間と思いが重なったのである。そのため、これら終わりの五首は、詠嘆の形となる。初出形の歌をみると、さらにそれは絶唱となる。ここにおいては社会的義憤に直接つながる以上に、強く白秋が憤るのは、「人間の存在」の抛り所を奪う現実、あるいは「運命」に抗うすべをもたない自分であろう。また、それは遙か昔、故郷を失った自分を想起させる。それゆえ、「哀傷」を感じるのだ。であるから、この「哀傷」はまず、白秋自身の痛みであり、同様に小河内村の村民にむかう真実な感情でもある。

白秋の晩年における歌集『溪流唱』の「獅子舞の歌」をめくって、あれこれ考えるままに記した本稿は、まさに覚書に過ぎない。ただ、今回の考察で、こうした重層的な時間の中で、対象を観るのが、白秋の象徴を支える〈写生〉の要素としてあり、それゆえ、「心眼」という言葉が用いられると推測される。「近代幽玄体」の中においての「写生」の本質と「象徴」の詩法は、どのように機能して作品となるのか、「観る」姿勢が打ち出された『雀の卵』以降を今後、できれば、短歌以外の白秋作品を横断的にとらえながら、検証していきたいと考える。

※本稿においては歌集『溪流唱』の基本を昭和二十二年二月の新版に求め、初出異同については、岩波書店『白秋全集』11巻「歌集6」の校異で確認した。

参考文献

〈単行本〉

- ・『新聞集成昭和編年史 昭和十年度版』大正昭和編年史刊行会刊行、一九六七刊。
- ・岩波書店『白秋全集』11巻「歌集6」（一九八六年六月）、21巻「詩文評論7」（一九八六年五月）、35巻「書簡」（一九八八年四月）。
- ・北原白秋著『溪流唱』靖文社、昭和二十二年二月。
- ・季刊『短歌民族』第一号アトリエ社、昭和七年十一月。
- ・一九三三年版『全貌』アルス、昭和八年六月。
- ・木俣修著『白秋研究Ⅰ短歌篇』新典書房、昭和二十九年十一月。
- ・渡辺順三著『定本近代短歌史 下巻』春秋社、昭和三十九年六月。
- ・宮柾二著『白秋・超空』河出書房新社、昭和五十九年八月。
- ・薮田義雄著『評伝北原白秋』玉川大学出版部、昭和五十三年四月。
- ・江井秀雄著『多摩近現代の軌跡—地域史研究の実践—』けやき出版、一九九五年五月。

〈雑誌論文〉

- ・高村光太郎著「北原白秋の「思い出」」『文章世界』博文館、明治四十四年九月。
- ・篠弘著「『溪流唱』と『椽』」『国文学解釈と鑑賞』至文堂、一九八五年十二月。

〈資料〉

- ・奥多摩町誌編纂委員会『奥多摩町資料六 奥多摩町の民俗—民俗芸能—』奥多摩町教育委員会、昭和六十一年十一月改訂版。